

ゲーテンベルクの発明に関する新説

慶応義塾大学教授 高宮利行

【講師からのメッセージ】

紀元2000年は活版印刷術の発明者ヨハネス・ゲーテンベルクの生誕600年ということでドイツを中心に大々的に祝賀行事が繰り広げられた。

ゲーテンベルクの発明は、鉛合金による活字鋳造機、油性の印刷インク、それにワイン（或いは製本・製紙用）プレスを利用したものとして、過去450年間にわたって高く評価されてきた。

ところが2000年12月ロンドンで行われたゲーテンベルク生誕記念のシンポジウムにおいて、プリンストン大学シャイデ図書館のポール・ニーダム博士は、若手の物理学研究者と組んだデジタル発表で、活字鋳造機は1472年以降に使用されたもので、それまでは朝鮮活字と同しく砂型鋳造ではなかったのかとする新説を提出した。今回は、この点について、ビデオを用いて、わかりやすく解説したい。

〔参考〕高宮利行者『ゲーテンベルクの謎』（岩波書店）

■新刊紹介■ 鎌倉 - 日本の古都を訪ねて - 写真集 鎌倉 ガブリエーレ・リヒター著

鎌倉在住のドイツ人会員ベーター・リヒターさんの奥様、ガブリエーレさんが、このたび『鎌倉-日本の古都を訪ねて-』と題する写真集を江ノ電沿線新聞社から出版された。ガブリエーレさんはプロの写真家で、この夏は写真展（個展）開催のためにミュンヘンに滞在中だが、日本の大学でドイツ語を教えるかわら、ひまさえあれば愛機片手に長年住み慣れた鎌倉の町をあちこち散歩しておられる。今回の写真集はその産物と言っていいだろう。鎌倉の写真といっても、ここに見られるのは名所旧跡のたぐいではなく、ドイツ女性の注目を浴びた素顔の町の風景や人物ばかり、会員の皆様にもぜひお勧めしたい本である。（A4版96ページ 本体価格2,800円） 会員 岩崎 英二郎

湘南日独協会 2000年度活動予定

■8月25日（土） 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢2Fローズルーム

■9月22日（土） 第17回例会 講演会 13:30～

演題 「歴史を書き換えるか？」

ゲーテンベルクの発明に関する新説

講師 高宮利行（慶應義塾大学教授）

会場 ホテル法華クラブ藤沢2Fロータスホール

■10月27日（土） 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢2Fローズルーム

■11月24日（土） 第18回例会 講演会

演題 仮題「ベルリンの壁が壊れたとき」

講師 大島陽一氏（帝京大学教授）

会場 ホテル法華クラブ藤沢2Fロータスホール

■12月（日程未定） 忘年懇話会

8月の会員懇話会は 25日（土）です！

湘南日独協会では隔月で会員懇話会を開催しております。あなたも是非ご参加下さい。

日時 8月25日（土）午後6時～8時

会場 ホテル法華クラブ藤沢店2F

レストラン「ヴェルデ」ローズルーム

費用 各自自弁です。

湘南日独協会会報 (Der Wind)

VOL.3, NO.4, 通巻16, 発行 2001.7.28.

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shōnan

事務局：〒251-0055 藤沢市南藤沢8-9 中丸ビル2F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

湘南日独協会 会報

Der Wind

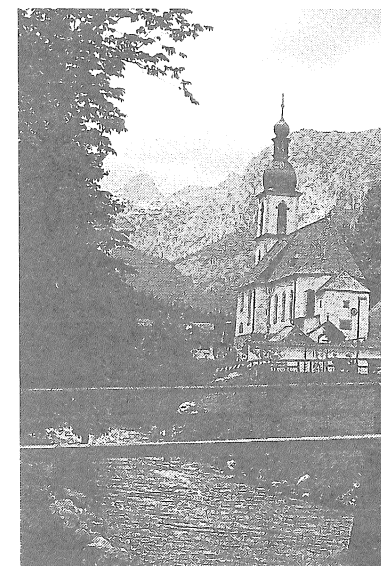
(風)

湘南日独協会 第16回例会

夏期懇親会

ドイツフェア

今年もビールの美味しい季節となりました。湘南の夏を彩る湘南日独協会夏の懇親ビール祭り「ドイツフェア」がドイツ料理とドイツの音楽とともに楽しく繰り広げられます。



ラムザウの教会

日時 2001年7月28日（土） 午後6時開場。

会場 湘南ホテル 演奏 楽団「シュヴァルベ」

自家薬籠中の物

会員 西澤 英男

去る5月26日、外は曇り空で蒸し暑く鬱陶しかったが、梶井さんご夫妻のリサイタルは、プログラムがよかったのと、会場の雰囲気はgemütlichで温もりが感じられ、さながら五月晴れのごとく爽やかで、楽しく盛り上がった。

前半のドイツ歌曲は、ベートーヴェン、シューベルト、そしてシューマンと、三巨匠の歌が揃い、三人三様、それぞれに味わいがあり、大変興味深かった。“ベートーヴェンの音楽の神髄は交響曲にある”と私は思っているので、歌曲はどうかとなると、シューベルトに較べればいささかの遜色を認めないわけにはいかない。しかし、袂を身に着け少ししゃちこぼった気分がなんとなく漂ってくところが面白い。

歌曲は、これはもうシューベルトに尽きる。それは他の追随を許さず、まさに歌の魅力を極限にまで高め、聴く人の心に訴える。セレナーデは曲の一つの形式であるが、セレナーデといえば、歌曲集『白鳥の歌』の中のこの曲にとどめを刺す。

シューマンの曲を聴くと、クララとのロマンスや悠々たるラインの流れを連想する。俗に言う、モーツァルティアン、ワグネリアンはごまんといて幅を利かせているこの世界、ときどきシューマン大好き人間に出くわすと、何故かほっとする。シューマンのロマン溢れる音楽は、聴く人を魅了してやまない。

後半は、ご夫妻の得意(?)とするオペラ、オペレッタアルバムである。

一昔前、今をときめくソプラノのS女史がウィーンフォルクスオーパーの男性歌手と、『メリーウイドー』のハンナとダニロに扮してデュエットしたのを聴いた(観た)ことがある。歌はともかく、S女史の演技の固



第16回例会 梶井龍太郎・智子夫妻“ドイツを歌う”より

かったこと。まるで金縛りにあった様子で、思い出す度に笑いが込み上げてくる。S女史には失礼ながら、“オペレッタはまだまだだな”と思ったものだ。酸いも甘いも噛み分けた大人の、いささか贅沢で高級な娯楽といえるオペレッタはこれを演ずる役者にとってなかなか難物なのだ。歌えて、踊れて、そのうえに容姿端麗という条件が加わると、我が日本には、残念ながらこれを満たす歌手はざらにはいないな、と思いつけてきた。

それが、今回ご夫妻のデュエットを聴いて(観て)、日本にもようやくオペレッタが根付いてきている、そしてウィーンのフォルクスオーパーでも日本人が充分やっていけるのではないかと、思ったほどだ。

そんな矢先、ビッグニュースが舞い込んだ。6月18日付産経新聞によると、ソプラノ歌手・幸田浩子さん(大変な美形)がフォルクスオーパーの専属となり、『魔笛』の夜の女王、『後宮からの逃走』のブロンデ、『愛の妙薬』のアディーナ、『ファルスタッフ』のナンネッタを演じるというのだ。素晴らしいことではないか。

周知のように、ウィンナ・オペレッタはJ・シュトラウスⅡやミレッカー等の活躍した「黄金の時代」、

レハールやカールマン等がそれを更に発展させた「白銀の時代」、この二つの時代に大輪の花を咲かせた。

ここはまさに宝の山。どれをとってもオペレッタの名曲ばかり。観る(聴く)人を陶酔の世界へと引きずり込む。シュトラウスの『こうもり』、レハールの『ルクセンブルク伯爵』、『微笑みの国』からオペレッタ通を泣かせる目玉の aria、さらにニコライ(ウィーンフィルの設立者)の現在も上演される唯一のオペラ『ウインザーの陽気な女房たち』から有名な aria。お二人の熱唱は、あらためてオペラ、オペレッタの楽しさを再確認させるに充分なものであった。

バラの季節にはちょっと早かったものの、アンコールの二重唱(Tausend rote Rosen blühen)が、また見事な出来。皆うつとりと聴き惚れ、いつまでも歌い続けてと願わずにはいられなかった。

オペレッタの醍醐味は、お客が大いに楽しみ、歌手もその役になりきって自らも楽しむところにある。そのオペレッタの名曲の演奏会を、我が協会は自前でできる。なんと贅沢で幸せなことだろう。

今回の例会にお出でになれなかった会員の皆さま、こうした愉快な会には万難を排してお出掛けなさいますよう、お勧めいたします。期待利益を失わないためにも。

末筆ながら、お二人と、伴奏の渡辺さん、松野さんと、「今回の歌は自家薬籠中の物でしたネ」との言葉をお贈りしたい。あつ、ちとほめすぎかな。

(注)

アンコールの曲はマイゼル(Meisel, Will A. 1897～1967 ベルリン出身 軽音楽・映画音楽・オペレッタの作曲家 舞踊・音楽養成所の教師、舞踊のパートナーを務めた後、音楽関連図書の出版に従事する)の代表作『Ein Walzer für Dich』よりセレナーデ『Tausend rote Rosen blühen』。